

2040 年の水都 東京

～都市史・土木史・景観の視点から～

日本大学 理工学部 まちづくり工学科

准教授 阿部 貴弘

□ 歴史に向き合う姿勢

○工学系分野における歴史研究・教育

- 過去を学ぶことだけが目的ではなく、過去を学ぶことを通して、いまを評価し、将来を見通す力を養うことが目的
- ∴ いま何を造り、何を遺すかという決断が、未来に生きる子や孫たちの暮らしに影響を及ぼし、そして、いまに生きる我々の仕事も、やがて歴史の一頁となる

□ 水都とは？

○近世城下町の独自性

- 古 代 都 城：中国の都城をモデルとした条坊制の都市構造。
古代律令制の象徴。
- 門 前 町：社寺の祭礼や法会の際に設けられた祭礼市が常設化。
参道沿いに宿坊や茶屋、旅籠屋などが建ち並び、参詣客をもてなす。
- 宿 場 町：五街道をはじめとする街道沿いに短冊状の町割。
本陣や脇本陣、問屋場、高札場、旅籠や茶屋等が建ち並ぶ。
- 中 世 湊 町：水上交通の発達に伴い活発化した国内外の交易拠点。天然の良港。
- 近世城下町：領国を一元支配しようとする大名による政治経済上の拠点。
中世までの軍事的機能を重視した山城から、都市経営に有利な水運や陸運の要衝、すなわち平城もしくは平山城へと移行。
身分制ゾーニング。
自然地形や社会経済の状況に柔軟に対応した日本固有の都市構造。
現在の主要都市の多くが城下町を基盤として発展
⇒ 400年以上続く都市のグランドデザイン

○水都成立の背景

- 主要交通手段としての水運（舟運） ⇒ 水路（濠・掘割運河）を基軸とした町割（都市設計）
- 都市設計にあたり地形を最重視
- 多面的機能を担うインフラとしての水路：
防衛、交通（旅客、貨物）、治水、排水、防災、レクリエーション etc.

○水辺を楽しむ文化の醸成（e. g. 江戸図屏風、江戸名所図会、名所江戸百景 etc.）

- 水辺に用事が多かった ⇒ 自分たちの水辺という意識

□ 近代以降の東京の水辺

○水路の単機能化（排水路化）と水質汚濁、埋め立て

○水辺文化の喪失

- 水辺に用事がなくなった ⇒ 水辺に対する当事者意識の欠如、他人事
- 水辺に無配慮なまちづくり：
首都高速道路だけが悪者ではない... 護岸、橋詰、ライフライン、公共施設、民間敷地 etc.

□ 水都 東京のいま

○水辺に配慮したまちづくり

- 東京都景観計画
- 新たな水辺整備のあり方検討会（東京都） etc.

○水辺文化の創出・再生

- 舟運の社会実験（国土交通省）
- オープンカフェ
- ヘブンアーティスト etc.

□ 2040 年に向けて 「世界一の水都 東京」のコンセンサス

○水辺の多機能化（水辺に用事を増やす）

- いま動き始めた取組みの拡充・推進
- やりたいことをやることのできる水辺に（手段は豊富）
（やるために知恵を絞る >> できない理由を考える）

○水辺を基軸としたまちづくり

- 水辺に対する配慮をあたり前に（あらゆる主体が） ⇒ 公共空間の質の向上
- “エッジ”としての水路から“パス”としての水路へ
・・・東京都心の都市構造 ⇔ 江戸の都市構造 ∴ 東京は水都江戸の骨格を継承

○水辺文化の継承

- 水辺で遊んでいた世代の高齢化・・・水辺で育まれた文化の喪失の危機

○水辺のブランド力の向上

○身近なインフラ・ツーリズム、ヘリテージ・ツーリズム

- ものの見方が変われば、考え方も変わる・・・水辺の見方を変える
⇒ 水辺に対する関心を高める

以上